

津軽や下北地方のねぶた、八戸の三社大祭が終るとすぐにお盆がやってくる。県内では8、9月とまだまだ祭りの季節が続く。日本の



鯨ヶ沢町白八幡宮祭礼（平成17年） 県史編さんグループ所蔵

津軽の山車祭礼

清野 耕司

（県民生活文化課県史編さんグループ）

お神輿を担ぐ神社祭礼が行われていたのである。4月に紹介した下北の山車祭礼に続き、今回は津軽の山車祭礼を紹介する。

かつて城下町弘前においては、「弘前八幡宮」の祭礼が弘前藩の主導で整えられ、江戸時代の記録も多く残っている。宝暦6年（1756）8月15日の「八幡宮御祭礼帳」によると、町奉行以下の家臣団が先導

のではないだろうか。我が青森県にも古式ゆかしい祭礼が現在でも息づいている。八戸三社大祭に代表される山車まつりが広く分布する南部地方と、近世に海上交通の要衝として多くの湊を抱え、京・大坂や江戸の都市祭礼を間接的に伝えている下北地方は、山車祭礼の宝庫ともいえる。ところが、ねぶたの盛んな津軽地方においても、かつては、

警護をつとめ、町人は支配町組毎に丁印（町印）という各町の飾りを先頭に、台乗りの人形や「山」という山車・各種練物（神輿に従う歌舞や屋台など）を出す盛大な行列の様子をうかがうことができる。また、港町青森でも江戸時代の町の総鎮守「毘沙門堂」の祭礼が行われていた。1700年代の前半には、各町の山車や練物が多数出る祭礼であつた。これら津

軽地方の神社祭礼は近代に入り次第に衰微し、残念ながらそのほとんどが姿を消してしまつた。江戸時代の後半から末期にかけて、神社祭礼とねぶたが両立していた時代を経て、現代のねぶた隆盛を迎えた。事実は、その間の事情を物語っているようでもあるが、かといって神社祭礼が廃れたのはねぶたの影響であるという性急な断定は控えたところである。

このような津軽地方において、現在でも江戸時代からの伝統を継承している唯一の山車祭礼が、鯨ヶ沢町の白八幡宮大祭である。江戸時代には十三・深浦・青森とともに津軽四浦の一つとして、主に西廻り航路に海産物などを積み出し、木綿・古着・塩・雑貨などを移入して繁栄し町場を形成していた。つまり、上方と藩とを結ぶ海運の起点となつた藩有数の港町には、その結果として上方や日本海側の文化が少なからず持ち込まれ、祭礼にも大きな影響をもたらしたことは想像に難くない。

現在、祭礼の執行は四年に一度、8月14日から16日まで神輿渡御行列・山車運行為中心としたもので、行列の人員の確保や、各町山車の囃子方の後継者育成などに苦慮しながらも、地域の方々の誇りと情熱に支えられて存続しているのである。白八幡宮大祭は昨年行われており、次の執行は平成21年となる。